

## 第4分科会

### 第3分散会

#### I はじめに

分科会基調として、「人権確立をめざすまちづくり」という分科会テーマに沿い、まず実践報告協力者自身の同和問題との出会いから、自分自身の差別性の気づきについて話を進めた。出会いではマイナスイメージの植え付けを感じ、結婚問題などは建前で対応しようとしていた自身の差別性に気づいた。「知らない」「わからない」ことだらけのなか、「同和はもうよかとです」という住民の声もある中進めていった地区懇談会での取り組みによって、たくさんの人に差別に気づききっかけづくりを行えた。全国人権・同和教育研究大会で今でも交流の続く人との出会いがあり自分の財産となっていることなどを通じて「1人の100歩より、100人の1歩」を大切にこれからもしっかり取り組みをつなげていきたいという願いについて思いを述べた。また「人権確立をめざすまちづくり」には、人づくり、そして仲間づくりが必要なこと、一人では実現できないことも、仲間がいれば「差別を許さない社会の雰囲気をつくっていくことができる」と提案があった。その後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

#### II 報告及び質疑討論の概要

##### —報告1-⑨

「言いたくないけど、知ってほしい。」

(熊本県人教)

荒尾市でスクール・ソーシャル・ワーカー(以下SSW)として勤務。相談者の中には「今まで誰にも言えなかった」ことを勇気をだして話してくれる方もある。話を聞きながら、自分にも勇気をもたないと語れなかったことがあると気づいた。

父と血のつながりがないことを、「普通の家族とは違う」「かわいそうな存在」と思ってきた。それでも、それは結婚の際、相手の両親に絶対言いたいことだった。勇気をもって話したことで、だれより自分自身が、自分の家族のあり方に偏見をもっていたことに気づいた。「言いたくないけど知ってほしい」ことを話し、今は、これが自分の家族の形で宝物だと思っている。荒尾市で勤務し、部落差別が今もあることを知った。「言いたくないけど知ってほしいこと」は、部落差別でも同じことがあるのでは

ないかと思った。部落差別は、自分と関係のない世界にあるのではなく、自分の中にあった。

SSWとして働きながら、目の前の子どもの辛く、悲しい経験も、いつかその子の一部を形成するものになっていくよう、しっかり寄り添い、子どもたちの笑顔を守っていきたい。

※報告者は体調不良により急遽欠席となり、荒尾市同教の西丸さん、山口さんに質問に対する回答をわかる範囲でお願いした。

##### —主な質疑と意見—

福岡 「いちばん言いたくないことは、いちばんわかってほしいこと」と改めて思った。質問だが、吉川さんはSSWとして、荒尾市で部落差別事象に出合った経験はあるのだろうか。

報告者 直接出合ったことはないようだが、子どものかかわりの中、また学校経営案を読みながら学んだようだ。

協力者 どのように報告をまとめられていったか。

報告者 荒尾市では教育委員会と市長部局で2本のレポートを全人教にあげている。学校職員は部落問題との出会いや出会い直しなどのレポートを書く機会があるのだが、報告者は、行政職員なのではじめての経験だった。最初の打ち合わせで、まずは事務局としてかかわっている私自身の同和問題との出会いと解消に向けての道のりを伝えた。最初は、文章の中でも「主人」という言葉を使っていたりしたので、そういった細かい気づきをやりとりしながら仕上げていった。そのなかで、これまで言いたくないことだったが、文章をまとめて、これが自分の宝物だと気づいたと言い、「荒尾市の大会に家族も来てもらってもいいか？」と尋ねられた。発表を通して同じ立場の人とつながりもできたそうで、私も「自分を語ることは、人とつながることだ」と実感した。

福岡 レポートの中に部落差別が「最も身近な自分の中にありました」とあるが、これは、具体的にはどういうことか。部落の子との直接のかかわりはあるのか。

報告者 校区内に部落があっても、なくても、すべての学校に部落問題はあるとらえている。はっきりと確認したわけではないが、「自分が家族のあり方を言いにくいことと思わされていたこと。これは部落差別でも同じことが言えるのではないかと思った」と言っていた。差別があるために、ありのままの自分を否定しなくてはならなかったことは、いろいろな人権課題につながることで感じ、重ねたのではないか。それまで知識としての部落問題で、自分のものになっていなかったということもあると思う。

私事だが、私は生まれつき左目の視力がない。なので、見える状態と比べたこともない。この見え方が自分にとってあたりまえなのに、両目が見えるほうが優れていると感じて、自分で自分を差別していた。自分も世の中の価値観を疑わず、思い込まされていた。

福岡 文中の「子どもにはあまりに辛く、悲しい経験をしている子どもたち」には、どんな対応をしているのか。

報告者 SSWとして、相手と自分はちがうのだから、同じような経験をしたとしても、「私もこうだったから、あなたの気持ちわかるよ」と安易に言わないように気をつけて対応していると言っていた。

福岡 自分が受け持ったクラスで、家族や自分のことをこのクラスでなら言えるという関係性がつくると元気が出る。

質問だが、教育委員会と市長部局からのレポートというのは、どういう仕組みか教えてほしい。

報告者 人権問題は行政の責任であるので、市長部局からもレポートを提出してもらう。8月の荒尾市同教大会には、各学校から1本、行政からは2本、就学前2本、運動体から1本、校長会1本、共闘会議から1本だしてもらうという形で行っている。行政と就学前のレポートは、事務局が訪問し、話し合いながら書いてもらうようにしている。

## 一報告2-⑫

### 「外国人介護者が働きやすい職場づくり」

(鳥取県人教)

鳥取県倉吉市の高齢化率は全国平均より高く、人口も減少しており、介護者確保が大きな課題となっている。そこで、「外国人介護留学生奨学金プログラム」を構築し、介護福祉士の養成をはじめた。

受け入れには、「安定した介護者確保・事業継続」、「職場風土の変革」、「将来形成への貢献」、「地域活性化(社会貢献)」、4つの意義があると考えている。

介護者となった留学生が働き続けたいと思える職場をつくるため、受け入れの第一歩となる「相手を理解する」手立てとして、必ず現地訪問を行っている。自らの五感で確かめることは、職場風土の形成に大きな影響があった。次に、迎え入れる側の職員教育を徹底して行った。コミュニケーションを円滑に行うため、「やさしい日本語」や簡易な表現、簡単な構造の文をつかうことを心がけている。日本語の学習支援や宗教への配慮、住環境の整備にも力を入れている。現在、法人内での伴走支援にとどまっているため、行政との有機的な連携を模索中である。

共に働く大切な仲間として、今後も受け入れながら、ともに変化していきたい。地域との接点も増やしていきたい。行政とも協力しながら、外国人労働者同士が気軽に集まれる場づくりも行っていく。

報告者は、職場以外で近所の人に話しかけられ仲良くなれたこと、自分は日本語を使っているのにコンビニで店の人にジェスチャーで返されたこと、毎日5回のお祈りをさせてもらえるか不安だったが、場所も時間も準備してくれて、快くさせてもらっていることなど、日本での生活を通して感じたことを語った。

### 一主な質疑と意見一

佐賀 小規模校に勤務していたとき、この子たちは中学校できちんと自分の意見を言えるだろうかと心配していたことを思い出した。

受け入れ側のすてきな取り組みをきかせてもらった。気になったのは、言葉の壁の問題で、通訳や翻訳アプリを利用するのか？

報告者 N1からN5という日本語のレベルを測る検定があるのだが、日本語でのある程度の意思疎通が可能なN3レベルで入国してもらうことにしている。その後、日本語学校でN3のレベルをN2まで上げてもらうようにしている。日々の業務の中では、日誌の添削などもして学んでもらっている。悩み事や病院など日本語で伝えるのがむずかしい場合は、インターネットを活用して委託契約している通訳の人と話してもらったりする。

福岡 外国人就労者の増加に伴い、地域コミュニティのなかで、どううまくやっていくのかが課題となっている。行政とは、具体的にどうやっていこうとしているか知りたい。

報告者 賃貸物件などが少ない事情もあり空き家バンクのこと、また近所のスーパーではなかなか売っていない調味料などを簡単に調達できるようにならないかお願いしている。お隣の鳥根県出雲市には多くの外国人労働者がいて補助制度やサークル活動なども充実していると聞いている。一企業の努力だけではむずかしいところを行政と協力していきたい。

兵庫 姫路市教育委員会で外国人の子どもを受け入れる活動をしている。企業側には継続して就労してもらいたい思いがあると思うが、ウインディさんに子どもができたなら、どんな学校なら日本に残って通わせたいと思うか？

報告者 差別されることのない学校。肌の色、断食やお祈りなどの習慣もちがう。断食期間は給食時間は別室でなどの配慮が欲しい。

鳥取 子どもは5人ほしい。イスラムの学校に入れたい思いもある。小学校に通うまでには読み書きの練習をさせたいと思う。断食期間の配慮はお願いしたいと思う。

熊本 自分自身、外国の人に対する偏見をもっていたと思うが、報告者のまわりはどうだったか？研修の際の職員の雰囲気はどうか？伊藤さん自身受け入れを通してうれしかったことは？

報告者は、周囲の差別的なまなざしを感じたことはあるか？仕事関連でうれしかったエピソードはあるか？

報告者 勉強不足、意識不足もあって、見過ごしていることもあるかもしれないが、あまり感じることはなかった。とにかく、介護者不足をなんとかなくてはという意識でやってきた。職員は、外国人介護士が配属される前にインターネットを介して顔を見ながら対話をする。思ったよりしゃべれるということを確認して、一緒に働くのが楽しみになったという感想が多い。

イスラム教信仰者にとって最大の親孝行はメッ

力巡礼。報告者は、この若さで12月に達成する。すごいなーとうれしく思っている。日本で働いて、後輩たちの手本になってくれているのもうれしいが、報告者がうれしいことが、自分たちにもうれしいことになっている。

報告者 とくに差別は感じていない。うれしかったのは、専門学校卒業式に着物を着たいと言ったら、職場の人が着物の手配を手伝ってくれて、ぶじ卒業式に着物で出席できたこと。

大分 居場所があることはとても大事だと、自分自身の経験を通して実感している。地域との接点づくりやこんなイベントがあればいいというものがあれば教えてほしい。

報告者 地域とのかかわりは、今のところ夏祭り、秋祭り、そして介護教室など施設が開催する催しに地域の方に来てもらっているというかかわりで、こちらから地域主催のイベントに参加することはできていない。今後は、法人として、職員への情報提供やつなぎ役を担い、ほかの企業で働く外国人労働者同士が繋がれる交流会を開催できればと考えている。行政には、つながれる場(ハード)を提供してもらえるといいなと思う。

報告者 おまつりは大好きで、あればぜひ参加したいと思っているが、勤務の調整が必要なので、1か月前前とか、情報が早く手に入れられようにしてもらえると参加できる。

## 1日目総括会議

福岡 差別をなくすための取り組みではすべてのひとが当事者である。先輩たちの同和教育からの学びを得ながら、仲良しだったから差別をしていないと思いきみ部落差別を見抜く目がなかった自分自身の差別性と出会い直した。子どもたちにとって、教室の中で教員は権力者であることも自覚した。現在、虐待の疑いのある子どもの事例があり、関係各所と連携しながら取り組んでいる。子どもをまるごとつかむことが大事だと思うので、家庭訪問も難しい状況であるが、同和教育で学んだことを実践としていかしていきたいと思う。

熊本 現在の職場で働く前、退職後半年間ほど土木作業員として働いた。インドネシアから働きに来ている2人と毎日一緒に過ごした。家族に送金するため郵便局に連れて行ってというので車に乗せて行ったら、そんなに余裕のある生活でもないのに、お礼に飲み物をおごってくれた。外国人に「がんばれ」というだけじゃなく、こちらから歩み寄ることも大切だと思う。

ある会議の中で参加していた校長先生が「親の学歴が中卒と言えず、ずっと見下していた。」と話された。自分は「言えないこと」と思った経験はなく、学歴に対する偏見が自分の中にあったことに気づいた。

協力者 しんどい思いをしている当事者ががんばるべき問題なのか。言えなくさせている社会の問題ではないのか。マジョリティ側の意識の問題を、

もっと考えてみたい。

熊本 自分の課題、自分の問題としてとらえられることが重要。自分が問われている。社会って何？と言われれば、社会は私と答える。社会の問題は、私の問題である。

高知 教員になった初めてのころ、担任をしている子ども同士が結婚差別の加害者にも被害者にもならないようにと思って担任していた。同和教育主任になって、問題と向き合えるようになってきたとは思いますが、差別をなくす熱い気持ちをもっているかと問われたら自信がなかった。自分の手の届く距離にいる人たちの聞き取りをとおして、その人の憤りが自分のものになり、自分から湧き上がる差別をなくしたいという原動力になっていったと思う。

兵庫 教員による土地差別。「差別はダメ」という認識はもちろんあると思うし、子どもたちにも、そう教えているはずの先生が、自分のことになると差別をしてしまう現実がある。差別の実態を知ったときに、憤りをもつ人と向き合えない人のちがいはなんだろうか。

香川 部落に住む人間は見えない壁、重たい闇、荷物を背負っている。どんな反応されるか、周りの先生に「部落の土地売ってあげるよ」と尋ねてみてほしい。現にそこに住んで生きている人がいる。その気持ちを考えてほしい。やっぱり、みんなわかってないんじゃないかと感じる。自分ごとってどういうことか。きれいごとになっていないか、と感じる。もっと教え方にやりようはないのだろうかという気持ちになった。

2本目の報告を聞いて技能実習生と一緒に働いたことを思い出した。安売りスーパーに買い物に行ったり、給料が出たらラーメンをごちそうしたり、心と心の交流があつて、わかりあえて、笑いあえた経験がある。

協力者 いまの「みんなわかってないんじゃないか」という発言を、「もっとがんばれよ」というエールとして受け止めたい。

埼玉 一言で言うなら、とにかくそばに立っていることはできるのではないかと思う。

SSWIにも自分のことを相談できる人の存在がきちんと確保されてほしい。

妻の同級生にミャンマーの人がいるつながりで、行政の支援がないときから、いろいろとかかわってきた。個人や法人の努力だけでなく行政のサポートは重要だと思う。

「支援しますよ」という人が周りにいることが大きな支援になる。

高知 自分は吃音症で流ちょうにしゃべることはむずかしい。吃音のため、学生時代はいろいろあった。今、同年代の人とオンライン上でゲームをしていると人権侵害ではないかと思われる言葉が飛び交う。でも、本人たちには、そんなつもりはない、ということがあり、人権に関心がない人が結構いると感じている。職務として、人権関連のイベントを開催すると参加者が少ないと感じていたが、これなら

みんなが楽しめるだろうと企画したイベントには結構人が集まった。きっかけをつくっていくことが大事なのではと感じている。

**福岡** 小学校にゲストティーチャーとして招かれることがある。そのときに福岡県からただひとり水平社創立大会へ参加した T さんの話をしている。「T さんに直接会って話を聞いたことがある」と話すと子どもたちはとても驚く。子どもたちの顔を見て、やってよかったと感じる。子どもたちにとって、教師以外の人と出会い、話を聞く経験は意味があると思う。

**協力者** ゲストティーチャーは、先生では伝えられないことを伝えてくれる大きな存在。結婚差別の話をしてほしいと声をかけると、「結婚差別はおかしいことだからいくらでもしゃべる。でもそのたび立場宣言をしていることになる。いつまで続けたら『こんなことおかしい』ってみんなが動いてくれるようになるだろうか。状況を変えていってほしい」と言われた。早くみんなが動く社会になるようがんばれというエールとして受け止めている。

**高知** 外国の方との交流の場として日本語サロンを月に1回行っている。先日「ミカン狩り」をしたら、言葉が通じなくても盛り上がった。こういった機会をどんどん増やしていきたいと思う。

**大分** さきほど立場宣言をされた方を見て、はじめて、紙の上でもない、画面を通してでもない、実体験として「部落問題」を感じた。

学校の施設管理の仕事をしていて、雨漏りのする学校現場をみたとき、いくら予算がつかないといっても、このまま放置されているのはおかしいと思い、自分たちで工夫して簡単な補修を行うことができた。これまで仕方ないとあきらめていたことが解決でき、やっぱりあきらめたくないと思った。

先輩から目を合わせて「死ぬ」と言われたことがある。1週間学校に行けなかった。周りの支えがあり、自分の人生をあきらめたくないと思って、また行けるようになった。あきらめなくてよかったと思っている。あきらめない心は大切だと思う。

## 1日目まとめ

明日に向けて考えたい視点として、1本目の報告から、自らを解放することをためらわせる社会、勇気をもたないと話せないことがある社会をどう変えていくのか、知らず知らずのうちに日常生活のなかで形づくられる偏見、世間的な「あたりまえ」をどう自覚していくのか、社会にある問題はすべて自らにかかわりがある問題と意識できる授業、研修をどうつくっていくかということがあると思う。

2本目の報告では、外国人労働者が働きやすい職場づくりという視点をおして、だれもが暮らしやすい社会について考えた。ちがいをまちがいにして差別につなげることなく、また相手にのみ変わることを強要する同化にならないよう、「ともに」変わることを考えたい。

総括討論では当事者にしかわからない痛みとい

う問題提起もあった。人権問題の解決には想像・共感・理解が大切であると思うが、想像力には限界があり、言動の意味は分かっていても絶対に共感できないこともある、また完全なる他者理解はむずかしい。それでも、わかろうと努力をつづけること、あきらめないことはできるのではないか。ともに社会を変える仲間になること、反差別の生き方にどうみんなが立っていくのか、明日は地域で活動する団体の活動をとおして、自らの居場所で実践できる取り組みを交流していきたい。

## 報告 3-⑩

### 「人権のまちづくり」の確かさと広がり求めて (福岡県同教)

「福岡県同和教育実態調査(1990年)」と「久留米市同和教育実態調査(1994年)」を受け、また、「人権教育のための国連10年」と連動する形で、原因を探る取り組みが、まちづくりの取り組みにつながっていった。中学校区を単位とした「人権のまちづくり推進協議会」は、2001年の屏水中学校区を皮切りに2008年までにすべての中学校区に広がった。

子どもたちは正しい知識を身につけ成長していくのに、周りの大人が学ばないと子どもたちは混乱する。そこで、子どもたちから学ぶ「人権学習授業参観」は地域の人も参観する。校区で一番大きな年間行事では「人権劇」を上演する。当日観劇してくれる人への啓発はもちろんだが、練習の過程で参加者一人一人が差別の現実についてさまざまなことを学ぶ。

江南中校区で取り組んでいる「ひして侍」という劇は、先輩教員の地域のおじいちゃん、おばあちゃんへの聞き取りで掘り起こされた。台本づくりでも、たくさんの方の思いを知り、練習では、参加者が当時の人たちに思いをはせながら、「何を伝えたいか」、「どうしたら伝わるか」考えながらすすめた。この姿こそが人権のまちづくりの第一歩と感じた。

初めて担任した部落の子Aとの関係づくりの経験が、私が部落差別をなくす行動をする原点である。丁寧な授業を心がける一方、差別を温存助長するような生徒の発言が起こることもある。これまでの取り組みをさらに強化し、人権のまちづくりに取り組んでいく。

地域と学校のつながりは、垣根を低くし、やがてなくしていく。そのためにイニシアティブをとってくれる人を1人つくる。よい流れをつくり、それを止めないこと。いろいろな人を巻き込みやっていくのが、「人権のまちづくり」の一番の近道と思う。

#### —主な質疑と意見—

**福岡** 「ひして侍」の中学校での上演について、こども、大人の役割はどんなふうになっているのか？

**報告者** 大事にしているのは地域の方がかかわること。当時は、地域の方、校区人権啓発推進協議会のメンバー、PTAなどがステージに立ち、先生方には音響などを手伝ってもらっていた。今

は、上演に生徒も巻き込み、取り組みが発展している。

**熊本** 練習の時間が学びを深めるという話があったが、自分自身も、解放子ども会の劇の取り組みの中で話せば話すほど自分の差別性があらわにあると感じたことがある。でも、取り組みはそこから始まると思う。練習の合間のやりとりや気づきを具体的に知りたい。

**報告者** 具体的とは言えないかもしれないが、私は同和教育を受けたことがなかった。たぶん差別もしていたと思う。そんななか、いろんな立場の人の気もちや考えを聞き、それまで断片的だった点と点が線となり、「人権のまちづくり」とはなにか理解してきたように思う。劇中のセリフが、気もちが昂ってでてこなくなることもある。その都度中断し、思いを共有した。観劇された人から、自分の住んでいるところでもやってもらえないかと声がかかるなど、取り組みが広がっていくことがうれしい。

印象に残っているのが、練習に異動された先生も差し入れをもって訪ねてきてくれたこと。離れても、差別をなくすという思いを共有しつながっている。地域の人にだけがんばらせない。自分たちも一緒にという思いも共有している。

**福岡** 取り組みの広がりには現役中学生、卒業した高校生だけでなく、卒業生が保護者となって参加することもある。地域の中にいい循環ができていていると感じる。

**愛媛** レポート内に「差別を温存助長するような生徒の発言」という文章があるが、いつどんな場面でどんなことがあって、そのとき、どのようにかわったか、話せる範囲でいいので教えてほしい。

**報告者** 一つ一つ具体的に話すことはできないが、賤称語を用いた発言が、友達同士の会話の中で自虐として使われたり、相手を傷つける、貶める目的で使われたりしている。教員としては、どうしてその言葉を使ったのか、そのときの思いはどうだったか丁寧に聞き取りを行っている。学校全体で問題意識を共有し、関係機関に報告もしながら、実際の学習にも活かす中で、子ども同士で注意できる場面も生まれている。

**福岡** 校区人権啓発推進協議会で、教員として地域と学校をつなぐ役割を担い活動している。自分の差別性を払拭したとまでは至っていないが、当事者との単発ではない出会い、学び、継続した密なつながりで「人権のまちづくり」を進めている。簡単には語れない差別の現実だが語ってもらえないと気づかない現実もある。せめて安心して語れる場をつくろうと互いの信頼関係の構築に努めている。定例役員会で地域の願いを聞き取り、小中PTA、支援サポーターと交流し、参加体制を整え、日常的な交流を大切にしながら、学習会では地域の本音を引き出す。地域とともに一緒になって学習を進め、多くの人に差別をなくす取り組みを自分事として感じてもらうこと、そして、次の人を育てバトンを渡していきたい。

**福岡** 「ひして侍」は、自分の地元の話でもあり、子ども会にかかわって、掘り起こしを文字で読んだ。これからも子どもたちに伝えていきたい自分の宝物である。厳しい差別の中でも人の命を助けていた先達の思いの発信はプラスにしかならないと思っている。この話に出合って30数年、展望を持ち伝えていくことに使命感を感じている。「人権フェスタのステージでできたらいいよね」というセリフは、当初の台本づくりでとくにこだわったところで、実現できてうれしい。

#### 報告 4-①

#### 「おなかも心も満たす地域(わたしたち)の居場所」 (高知県人教)

長岡西部スマイルファクトリーは、地域行事の企画運営、地域の川の清掃、地域の伝統文化である和太鼓の演奏と演奏指導、隣保館事業のサポート、学校や研究大会等での講演などを行ってきた。代替わりしても思いを受け継いで活動を続けている。それに加え、昨年度から、高齢者と障害者対象のデイサービス食事会、そしてこども食堂をはじめた。

児童養護施設での勤務経験から、おなかが満たされると心も満たされること、生活が整うと穏やかになっていくことを体験的に知っていたが、メンバー内でこども食堂をはじめようという声が上がったとき、本当に必要としている子がこられるのかと開設には懐疑的だった。しかし、あらためて周りを見たとき、必要性を感じ、「人と人とのつながりをつくって深める」というスマイルファクトリーの目的のためには食堂が必要だと感じるようになった。

2023年3月、「スマイルこども食堂」を立ち上げた。提供するメニューは食育も兼ねて、多くの食材をつかうメニュー、また、ふだんあまり口にしないであろう料理も並べる。地域の食文化を体験する機会にもなっている。またデザートは手づくりこだわっている。当初30人ほどの参加者ではじめ、1年半経った今では、前回の参加者が100名越えとなった。家や学校とはちがう、社会を学ぶ場所にもなっていると感じる。

スマイルファクトリーは、現在、昔から活動してきた解放子ども会の仲間だけでなく、地域をよくしていきたい、子どもたちの成長の助けになりたい、部落差別をはじめさまざまな差別に反対し、人権が尊重される世の中をつくりたいというメンバーが徐々に増えている。楽しみながら活動している私たちの姿を見て、子どもたちが将来地域の担い手になりたいと思ってもらえたらと願っている。

#### —主な質疑と意見—

**高知** 隣保館の女性学級で先月視察させてもらった。地域活動は廃れる傾向にあると感じていたが、目からうろこの視察だった。若者の活躍が突出していて、リーダーが存在している。行政とも連携を取りながら進められているが、どんな工夫をしているか。

**報告者** スマイルファクトリーは任意のボランティア団体。子ども食堂については、子ども食堂登録団体として県の補助金を受け、食材費や広報費に充てている。そのほか、地域行事に出店し販売などによる収入を得ている。

**愛媛** 参加者を増やすための取り組み、実際参加した人たちの声、活動に対するネガティブな反応があれば教えてほしい。

**報告者** 広報はチラシを作成し、保小中に配布。活動を忘れられないように数か月ごとに配布している。そのほか、口コミ。SNS もうまく活用している。

総合的な学習などで学校に行くこともあるが、学校ではしんどそうな子どもも、ここではしっかり食べて楽しんでいる。地域から頼られていることも、参加者増につながっていると思う。

心もとない声は自分には届いてきていない。むしろ月に1回の開催を、もっと増やしてほしいと要望をもらっている。

学校以外にも保育所の夕涼み会などにも参加し、また自分たちのイベントにも声をかけるなど連携をとっている。

**高知** クリスマスにはサンタクロース、節分には鬼として保育園を訪れる。学校との連携ではコミュニティスクールディレクターや地域学校協同本部のコーディネーター、学校運営協議会委員を担っている。学校の取り組みとして収穫したコメや野菜を子ども食堂に提供してもらうこともある。デイサービスは、行政からの委託授業で行っているため従事者に給料を払うことができる。そこで、休職中の人や求職中の人に、本格的に働く前のリハビリや外に出るきっかけづくりも兼ねて機能している。

活動が、しんどい子すべてに届いているかどうかはわからないが、みえている子どもたちから少しずつでも取り組んでいきたい。

**高知** 土日開催の子ども食堂が多いと思うが、ここでは、「平日に保護者も家事の息抜きしたい日があるよね」と第2木曜を開催日としている。家族と顔を合わせて食べる時間になっているのもいいと感じている。何人でも、どんとこい！と思っている。

### Ⅲ総括討論

**福岡** 実際の劇を見て「熱いなー」と感動した。劇の上演という追体験をとおして、子どもたちは変わっていく。私のかかわった「反戦平和の劇」の取り組みでは、大人は裏方で、子どもたちが主体だが、そこでいつもふざけている子どもが真剣な姿を見せる。取組を通じて変わった子どもが、中学校の生徒集会で「この学校は差別を許しません。」と新入生にうったえかける。以前に自分が差別的なことばを使ってしまった時の気持ち、学習を通して2度としたくないと思ったことを伝えながら「僕と同じ側になりませんか」と話しかける。教員ではこうならない。

**福岡** 報告者の誘いで同和教育へのとっかかりをつくってもらった。レポート中のAさんの在学中は

他校に勤務していたので直接かかわったことはないが、弟妹とかかわってきた。高1になった妹のことが気になり、家に立ち寄りたりしている。Aさんは、高校に行かなかったのが、弟妹には卒業してほしいと願っている。「城戸先生、今も家に来るんですね」とAさんは言っていた。家庭訪問をしてつながりをつくるって大事だと思った。

江南中校区の人権フェスタは26回目。コロナ禍を機にあり方を再検討した。大人たちも学んでいるということを知ってもらうため、地元、地域からの発信も行っている。子どもたちの居場所は学校だけではなく、地域にもあると思っている。

**高知** 隣保館事業「ふれあい教室」で和太鼓を教えている。不登校だった子が、太鼓で自信をつけ、笑顔も増え再び学校に行くようになった。太鼓は、伝統を伝えるだけではなく、自信をつける取り組みにもなり、子どもたちの居場所にもなっている。

**熊本** 高知の報告者のフロアの応援団とのやり取りを見て、仲間づくりができていたと感じた。

私のかかわった学校の校区内にある支部の書記長の話をしたい。1回目の出会いは、学習会の途中外に飛び出した子どもを追いかけて捕まえたところで出会った。そのとき、聞かれてもいないのにどうしてこんなことをしているかその状況を一生懸命説明した。説明しないと自分が怒られると思ったから。付き合いが長くなる中、当時の自分の弱さに気づいた。

子どもたちが集まる児童センターは、彼の居場所だったところであり、これからの子どもたちの居場所でもある。児童センターの前でうろうろして中に入らない兄弟がいた。兄から「大おばあちゃんがここに行くな」と言ったと聞いた。子どもたちは、総合学習の中で地域のことを学び、児童センターがどういうところか知っている。大おばあちゃんは児童センターがどんな目的で何のためにあるのか勉強していないから知らないのでは悪くないと伝えた。その後、兄弟は児童センターに入るようになった。そんな子どもたちから「いじめや差別はなくなると思いますか？」と聞かれると、「今の子どもたちは、正しいことを学んでいるので差別はなくなっていくと思う」と答えられている。すると、子どもからは「いっぱい差別をなくすためにがんばる」と返答があった。

**高知** これからの解放運動はどうなっていくのか。コロナ禍を機にあれこれ続けられなくなっているものもある。今年度の解放のまつりをどう開催していくのか、実行委員会でもなかなか決まらない。学校の働き方改革の影響もあるのか、先生から「私たちの人権もあります」との声も聞かれる。

**福岡** 自分自身にできることといえば、つないでいくこと。ムラのおじいちゃん、おばあちゃんの思いを、理解できないことはあっても、理解しようとする、そしてつないでいくことはできる。話をしてくれるのは、信頼関係ができてきたからという部分以上に、これまでの先輩が信頼関係をつくつ

てきてくれているからだと思う。先輩の思いもつないでいきたい。

**福岡** 私も思いをつなげたいので発言する。「ばあちゃんのリヤカー」という人権劇に取り組んだことがある。「人のがんばりや一生懸命さを見ている人に差別する人はおらん」というセリフがある。屏水中校区で学んだことを、今いる校区で広げていきたい。

**福岡** わからないことはいつだって直接話を聞きにいった。しかし、社会状況は変化してきて、今「子どもとつながりたい」「保護者とつながりたい」と思っても、先生たちにも縛りがあるなか、どうやって関係をつくっていけばいいか、先生も困っていることを地域の人にも知ってもらいたい。身近な1人、2人からつながっていけばいいと思う。全人教の場での出会い、話し合いで元気をもらった。自分の思いはだ出さないとわかってもらえないと改めて思った。

**熊本** 現在67歳。ムラのある学校に入ったのは50歳。そんなつもりはなかったけど、支部長と話しながら、相手を尊重する思いで相手の言うことにただただうなずいて対応していたら「差別しよ」と言われた。それは対等な態度なのかと。そう言われて考えてみれば、若い人と話すときと年長者と話すとき、自分が口調、態度を変えていることに気づいた。

教員として、行政職員として地域にかかわった人もいずれ来なくなることを、多くの人が経験している。今の職場で地域の家庭訪問をはじめた。「1軒1軒全部回ってよ。みんな話したくて待っているから」と言われる。ときには、「この何十年、少しは変わってきたか？それなら、どうしてあの子は住所を変えて学校に通っているのか」といった声も聞く。一人の力では変えられないこともあるが、覚悟を決めて「逃げん」と決めた。あきらめずに続けていく。

**福岡** 小学校6年生を対象とした教育集会所学習が何十年も続けられている校区。事前学習会の席で、先生同士がつながれていない問題、内容も含めて研修確保の課題について、また集会所設立の経緯や願い、次の担い手としての子どもの育成、話をする側の部落問題認識はどうかと問題提起した。教員は特定事業従事者として、もっとしっかり人権問題を知らなくてはならない。

### 報告者から2日間の学びと感想

**報告者(熊本)** SSWの激務を心配する声をいただいたこともあり、報告者本人に話していいか確認をとった。体調不良は妊娠によるものである。「どんな家族をつくっていけるか楽しみにしている。レポートを仕上げた今、誇りをもって一歩進み始めたいと思う」と語ってくれた。

**報告者(鳥取)** 現在、法人内での支援にとどまっているが、やりたいことはたくさんある。まずは、次のステップとして地域とつながりをつくる。自分

ごととしてとらえてやっていきたい。

**報告者(鳥取)** ほかの方の話を聞き、とても勉強になった。

**報告者(福岡)** この地で全人教が開催できたこと、啓発と学びの場をもてたことがうれしい。会場のみなさんの声を聴き、これをいかにつないでいくか、「当事者」という言葉が頭に残っている。今からどう生きていこうか考えるきっかけができたのではないかと思う。今後の活動に生かしていきたい。

**報告者(福岡)** 久留米の先輩、仲間をはじめ、さまざまな人の発言がとてもうれしかった。「部落差別をなくしたい」と考えて教師を志したわけではない。実際、正しく学んでいなかったため、子どもたちに「差別は許さない」と言いながら、無意識に差別をしてしまったこともある。気づかずに偏見をもっていたことにも気づいた。ある先輩から全同教岡山大会に誘われ、わからないままついていった。同和教育のゆたかさ、あたたかさ、あきらめず、もっと学びたいと思った。しかし、学べば学ぶほど、自分自身の差別性に気づかされ、逃げたくなる時もあった。そんなときも、仲間の支えがあり続けてこられた。部落差別をなくしていくため、微力だが無力ではないと信じながら、あきらめずにやっていきたい。

**報告者(高知)** 今、早く家族に会いたい、地域の子供もたちに会いたい気分。6年前、滋賀大会でも話をさせてもらったが、やはりしゃべるのは苦手。でも、毎回思いをもって発表している。これからも思いを持ち続けていきたい。緊張したけど力をもらった。つながること、そして当事者の気持ちをさらに意識しながら取り組んでいく。しんどいこともあるが、楽しんで活動をすることで、それをみている地域の人たちも、自分のまちを好きになるのではないか。自分のまちが好きという思いを根本にもって、発信し、活動していきたい。

### 分散会まとめ

**協力者** 私たちは、この大会に「差別をしてはいけない」、「差別を許さない」ことを確認するために集まっているわけではない。「差別をなくすこと」が目的である。水平社宣言から100年以上経過したが、今も差別はある。取り組みを連続と続けてきたのに、今も差別を残してしまっている。思いやりやさしさでは差別は解消されないことを実感し、一人一人が反差別の社会をつくる当事者であるという自覚を今一度もちたい。

1本目の報告では、報告者自身の中にある差別性をみつめながら、実は一番言いたくないことが一番わかってほしいことなのに、それを言えなくさせているのは、言えばどう受け止められるかわからない社会の問題であり、決して当事者が差別に負けない強さをもつことが解決策ではないことを確認した。

2本目の報告では、多文化共生の理解とはどういうことなのか、受け入れる側はどうあるべきか考えた。フロアからはどんな学校なら子どもを通わせた

いか質問が出され、報告者から「差別を受けない」ことと返答があった。地域とのつながり、そして企業だけでは実現できないことを行政と連携していく必要性、有機的な連携についても話し合われた。

3本目の報告では、地域の中での差別解消について、劇をつくりあげるプロセスの中で自分自身の差別性に気づくことが語られた。加差別性を認識し、そのうえで差別をなくすことをあきらめないこと、やり続けることを多くの方が話された。

4本目の子ども食堂の取り組みでは、地域の人と子どもが出会う場であり、集う人たちのつづやきをひろうことから困りごとを発見する場にもなっていることが報告された。取り組みを持続可能なものとするためにも、財政的な問題を考えることは重要で、給料の支払える委託事業が地域の人の就労支援につながっていることも大いに参考になった。

人権関連のイベントには人が集まりづらいという課題も出されたが、差別は差別をする側の問題で、マジョリティが変わる必要がある。世の中にある〇〇問題。問題にしているのは社会の側、つまり私たち一人一人であり、誰かが何とかしてくれるわけではない。一人ひとりの自覚を問い直す必要がある。

教員として、子どもたちの背景をしっかりとつかみ取ることを大事にしている。しっかりとつかみ取るというのは、子どものことを知っているような気持ちになってしまうこともあるかもしれないが、先生は、子どもが学校に来ている間のことしか知らない、つまり、圧倒的に子どものことをわかっていないことを知ること。本人の思いや願い、保護者の思いや願いを、知らないからこそわかりたいという思いを大事にしている。

今年の大阪の研究大会の前日、まちで偶然教えるに声をかけられた。初任校で出会った子で、現在24歳。昨年結婚したというので、「差別はあったか？」と尋ねた。「自分はなかった。でも、今もある。めっちゃ反対された子がいる」と話す彼の表情、声のトーン。彼に大会のことを話すと「今もあるって、伝えてな」と言われた。

今もある差別の現実はどう向き合うか。どう主体性をもってなくしていけるか。分散会の討議を進めながら、「当事者意識の認識にズレがある。本当にわかってきているのか」という意見があった。私たちへのエールだと思うと表現したが、それは「いつまで自分がこんなことを言わなくてはならないのか」という憤りとともに「頼む」という応援メッセージでもあったからだ。しんどい思いを本当にわかることができるかわからないが、わかりたいと思う。

今回の分散会でも、幾度となく「つながる」「つなげる」という言葉がでてきた。大変便利な言葉である。だからこそ、「つながった」状態がどういうものかを、一人一人がしっかりイメージすることが必要なのではないか。「いつまで自分がこんなことを言わないといけないのか」という当事者の声、言いた

いことも言えなくされている不合理、当事者の思いをわからないけどわかりたいと思うこと。反差別のまちづくりに参加しないということは、差別に出合っても気づかず見過ごしてしまい、結果、差別の拡大に加担すること。子どもたちは、すぐに大人になる。差別の解消は待たなしの状況である。それぞれの地で向き合うべき課題と対峙し、反差別の社会を実現する当事者として、具体的な行動に結び付けてほしい。そして、その行動を、来年またともに確認したい。